十文字学園女子大学人間生活学部紀要第４巻　2006年

「エデンの園」から「パラダイス」へ
－フィリッパ・ピアス『トムは真夜中の庭で』論－

From The Garden of Eden to Paradise
－A study of Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden*－

西澤喜代美
Kiyomi NISHIZAWA

序

ピアス（Philippa Pearce, 1920～）は『トムは真夜中の庭で』（*Tom's Midnight Garden*, 1958）を書いた意図に就いて、

> 想像力をもってしても、理性をもってしても、一番信じにくいことは、「時間」が人間の上にもたらす変化である。子どもたちは、かれらがやがて大人になるとか、大人もかつてはこどもだったなどときくと、声を上げて笑う。この理解困難なことを、私はトム・ロングとハティ・メルバンの物語の中で探求し解決しようと試みた。（ピアス, 1980, pp.348-9）

と述べている。この作品は、人間に及ぼす「時間」の不思議さ、すなわち「生きること」、「年をとること」、を真正面から描いた作品であり、子供には理解しがたい、人間に及ぼす時間・老いと死について深く考えさせられる作品である。

ピアスは「時間」の不思議さを、「ヨハネの黙示録」第10章６の「もう時間がない　Time No Longer」をキーワードとして、又、決して死に向かって時を刻むことのない「エデンの園」のイメージを使うことによって巧みに描いている。しかし、「真夜中の庭」は「エデンの園」だけでは論じ切れない。一般に「エデンの園」と「パラダイス」は同一視されているが、旧約聖書と新約聖書を見てみると、厳密には異なった存在である。無垢な幼子は「エデンの園」で遊び、原罪を負った大人は「エデンの園」を追われ、苦労し人生を送り、年をとり死ぬべき運命にあるが、死後は天国である「パラダイス」に迎えられるのである。子供たちの癒しの庭

十文字学園女子大学人間生活学部人間福祉学科
Department of Human Welfare, Faculty of Human Life, Jumonji University
キーワード：フィリッパ・ピアス、『トムは真夜中の庭で』、時間、エデンの園、パラダイス

であった「エデンの園」と死後に迎え入れられる天国の楽園である「パラダイス」、この2つの楽園の存在を認識してこそ、この作品の深いテーマが理解できるのではないだろうか。

1.「エデンの園」である真夜中の庭

主人公トムは、弟ピーターが麻疹にかかってしまったので、急遽叔母夫婦の家に預けられることになった。叔母さん夫婦には子どもは無く、庭の無いフラットに住んでいた。トムは麻疹にかかっているかもしれないので、外部との接触は禁じられ、運動不足と叔母さんのご馳走攻めにあい、不眠症になってしまう。眠れない夜、ベットの中で、いつも決まって間違った時を打つ階下のホールにある大時計の時を打つ音に耳を傾けていると、不思議なことに大時計は13時を打った。ベッドを抜け出、階下に降りたトムは裏庭に素晴らしい庭園を見つけるのである。その庭は、叔母さん夫婦の住むフラットがかつて農場主の邸宅であった頃のヴィクトリア時代の大きな美しい庭であり、今は存在しない庭であった。トムは毎晩、時計が13時を打つと庭を訪れ、この邸宅に引き取られたハティという孤児の少女と友だちになり二人で楽しく庭で遊ぶ。トムは現在（叔母さんのフラット）と過去（ヴィクトリア時代の邸宅）を行き来し、その上トムが訪れる時の庭の時間は、前に戻ったり、先に進んだり、この世の経時的時間とは異なっている。

この不思議な庭「真夜中の庭」は「エデンの園」として描かれている。その理由は以下に述べることができる。

トムとハティが遊んだ真夜中の庭は、邸宅の南の高い塀と、その反対側の低い塀と、邸宅の反対側にある生垣、すなわち邸宅を背に三方を塀に「囲まれた庭」である。「囲まれた庭」は「エデンの園」を意味する。

「エデンの園」が「囲まれた庭」であるという定義がなされたのは、旧約聖書の翻訳の過程にある。旧約聖書はヘブライ語で書かれているが、紀元前三世紀にギリシャ語に訳され（七十人訳聖書）、ラテン語には四世紀の終り頃ヘブライ語から訳されている。まず最初に、ヘブライ語の庭である「エデンの園」を現す語として、ギリシャ語のパラダイス *paradeisos* が使われた。*paradeisos* は土の塀で「囲まれた所」、楽しみの狩猟園（park）、庭園（garden）を意味するペルシャ語の *pairidaeza* を語源とし、以後エデンの園は塀で「囲まれた所」と言う定義がなされるようになったのである。

『旧約聖書』の「創世記」にはエデンの園に就いて次のように記されている。

> 主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻にふきいれられた。そこで人は生きた者となった。主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて（the LORD GOD planted a garden eastward in Eden）、その造った人をそこに置かれた。また主なる神は、見て美しく、食べるに良いすべての木を土からはえさせ、更に園の中央に命の木と、善悪を知る木とをはえさせられた。また一つの川がエデンから流れ出て園を潤し、そこから分かれて四つの川となった。（聖書, 1983, p.2）

聖書には、エデンの園から川が流れて出ていたとしるされている。そしてエデンの園から川が流れ出ていたように、トムは「囲まれた庭」から、川が流れているのを目撃している。（ピアス, 1980, p.187）

この作品の舞台は、ピアスの生まれ育ったケンブリッジのグレート・シェルフォードであり、ケンブリッジからイーリー一帯は「沼沢地帯」（the Fens）と呼ばれ平坦な地域であるが、トムは高い塀に登って庭の外を見回すと、「山の頂にのぼったようにひろびろとした景色がみわたせた。」（ピアス, 1980, p.187）とある。トムが塀の上、高みから一帯を見渡しているのも、「エデンの園」の伝統的なイメージにのっとって描かれているのである。聖書では上記のように「エデンの園」については非常に簡潔に書かれているが、現代われわれが抱く「エデンの園」の具体的イメージを作り上げたのはミルトンの『失楽園』（John Milton, *Paradise Lost*, 1668）であるといわれている。『失楽園』では、「エデンの園」は高い山の頂きにあったと描かれている。

さらにこの庭が、エデンの園であると確信させられるのは以下の個所である。家に戻るために叔母の家を去り、庭と別れなくてはならない日が近づいた夜、トムは夢を見る。

> トムは夢の中で、今夜がこのうちにいる最後の晩だと思った。彼は庭園に出ていこうと思って、階下におりていった。ところが、文字盤のところから天使がおりてきて、見る見るうちに巨人のような姿になると、燃えさかっている剣をふりまわして、トムのいく道をふさいだ。しかし、トムはどうしてもゆずらなかった。すると、とうとう戸口のところに立ちはだかっていた天使が横にどいた。そこでトムが戸口からそとをのぞいてみると、庭園は消えてしまって、ゴミ箱などのおいてある舗装した小さな裏庭があるだけだった。（ピアス, 1980, p.251）

「燃え盛る剣を振り回している巨人のような天使」、それはまさに「創世記」に描かれた図そのものと言える。「創世記」には、アダムとイヴがエデンの園を追われた時、「神は人を追い出し、エデンの園の東に、ケルビムと、回る炎のつるぎとを置いて、命の木の道をまもらせた。」（聖書, 1983, p.4）と記されている。

二人が遊ぶ庭はまさに、「エデンの園」もこんな風であったかもしれないと思わせる程、いつも天気が良く、花々が咲き乱れ、木々は緑深く、美しく描かれている。その他にも聖書の世界を思わせるものが描かれている。庭にはモーゼに十戒が授けられた時の「燃える茂み」を挿し木したマユミが植えられていて、実直で、信仰深い園丁の名前はアベルである。ハティを除けば、牛や小鳥のほかにはこの庭では誰にもトムの姿は見えないが、アベルだけにはトムの姿が見える。すなわち心清き信仰深い者と無垢な子どもと動物のみが、「エデンの園」であるこの「真夜中の庭」の住人なのである。付け加えればエデンの園では人間は動物と仲良く暮らしていたとされている。

しかしピアスが従兄弟たちと一緒にハティが、叔母に内緒でりんごの実を食べる情景を描いた時、我々はいずれハティもこの楽園を出て行かなくてはいけない運命にあることを予感させられる。

トムが我が家に帰る日が近づく頃、ハティは大人になっていて、トムが庭を訪れると庭は冬で一面雪に覆われている。もはや庭は常春の楽園・アルカディアではない。トムとハティは庭ではもう遊べない。「エデンの園」で遊ぶことができるのは無垢な子どもだけである。ハティは池でスケートをしているが、大人になったハティにはトムの姿が薄くなって透けて見えると言う。そして二人が最後に会った日も冬で、何処までも凍ったウーズ川を二人してイーリーの大聖堂までスケートで下って行く。川を下るという事は人生に例えられていることは言うまでもない。大人になったハティは、楽園を後に人生に旅立っていく準備が整っていることを暗示している。イーリーの帰り道二人はバーティ二世の馬車に乗せてもらうのだが、ハティの目にはもうトムの姿は見えない。そしてハティはバーティ二世と結婚することになる。

結婚式の前夜は大嵐になり雷鳴が轟き、庭に聳え立っていたもみの木に雷が落ち大木は倒されてしまった。「真夜中の庭」の象徴的存在だったもみの大木の倒壊は、「エデンの園」の崩壊を象徴的に描いている。稲妻の光は庭のすべてを照らし出し、邸宅の2階から庭を見下ろしていたハティは薄くなったトムの姿が屋敷の中に消えていくのを眺め、自らの子供時代に、「エデンの園」に別れを告げるのだった。「エデンの園」で遊べるのは、無垢な子どもだけなのである。結婚したハティは楽園を後に実人生へと、出て行くのである。

2.「時間」

1．で見てきたように「真夜中の庭」は「エデンの園」であるといってよいだろう。そしてこの作品のテーマである時間について語る時、「真夜中の庭」が死に向かって時を刻むことのない、至福の時を過ごせる「エデンの園」である事が重要なポイントになっている。

この作品を通して不思議な時、13時、を刻む玄関ホールに掛かっている大時計の文字盤の上には、大きな翼が生え、片足は草地に、片足は海に突っ込んでいる不思議な金色の天使の像が描いてある。天使の足元には「黙示録、第10章、1から6まで」と書かれ、時を刻む金色の大きな振り子には「もう時間がない（Time No Longer)」（ピアス, 1980, p.250）と書いてある。

「もう時間がない」。翻訳ではこの言葉の意味が十分に伝わらないが、*The Bible* －The Authorized Version－ では“there should be time no longer”（p.248）とあるが、*English Bible*では、“There shall be no more delay”（p.227）と書き改めてある。保坂訳の「もはや一刻の猶予もない。」（保坂, 1998, p.218）が聖書本来の意味を良く伝えている。黙示録的に解釈すれば、キリストの再臨と最後の審判の時までもう残された時間は無いという意味だが、ピアスはこの黙示録の言葉をトムとハティにとっての「真夜中の庭」での時間と、ハティ・バーソロミュー老夫人にとっての時間との二通りの解釈をすることで、作品に人生に対する深い思いと、不思議な時間の謎解きの面白さとを付与することに成功している。

家に帰る日が近づいたトムは、ハティと楽しく遊ぶ「真夜中の庭」を去りがたく、心ゆくまで庭で遊ぶ方策を考え出す。即ちいくら庭で遊んでも、おじさんのフラットに戻ると時間が過ぎ去っていないことに目をつけるのである。時計に刻まれた黙示録の言葉の意味を知らないトムは、「もう時間がない」を「もう時間は存在しなくなる」と解釈する。

トムはイーリーの大聖堂で「72歳で時間を永遠ととりかえた」と書かれた碑銘を見つけ、自分のしようとしていることは、まさにこのことだと思うのである。記念碑に刻まれた言葉は、この世の時間に別れを告げ、神の基で永遠の命を生きるというキリスト教の教え、即ちこの世の死を意味しているのだが、子供のトムには死は実感として感じられるものではなく、

> ぼくは、まあ、このロビンソンという人のまねをしようとしているようなもんだな、とトムは思った。このままほっておけば土曜日になってしまうふつうの「時間」を、庭園の中でいつまでも遊んでいられる「時間」―　つまり「永遠」ととりかえようというのが、トムの計画だった。「時間を永遠ととりかえた。」トムは声に出してくりかえした。（ピアス, 1980, p.286）

と、トムは考える。

「真夜中の庭」の時間は、死に向かって流れていくこの世の時間とは異なった時間である。「もう時間は存在しなくなる。」永遠に子供のまま楽しく遊んでいられる時間、決して死に向かって時を刻むことの無い「エデンの園」の時間なのである。

3.「パラダイス」である真夜中の庭

年老いたハティ・バーソロミュー夫人にとって13時を打つ時計の「もう時間がない」という言葉は、この世での時間はもう残されていない、「もはや一刻の猶予もない」、すなわち死期を予感させる言葉である。ロビンソン氏の大聖堂の記念碑に刻まれた「時間を永遠ととりかえた」という言葉と響きあう。

第１章ではバーソロミュー老夫人の住んでいる邸宅は「細長くて、地味で、しずんだ色（grave）の家」（ピアス, 1880, p.14）「その邸宅の中心がうつろで、さむざむとして、死んでいる（dead）感じなのだ。」（ピアス, 1980, p.15）と描かれている。「真夜中の庭」にもお墓を髣髴させる場面がある。トムが初めて庭に出て小径をたどっていくとアスパラガス畑に出るのだが、「アスパラガス畑の、お墓のような土盛り（grave-like mounds）がいくつもながくならんでいる」（ピアス, 1980, p.64）と、アスパラガス畑は墓にたとえられている。この邸宅とその庭がお墓（grave、grave-like）のイメージで表現されていることに、深い意味があるといえる。屋敷と庭はバーソロミュー夫人の死が近いことを予告しているのである。

愛する夫や息子に先立たれ年を取り一人寂しく、死を待つ夫人が、毎夜夢の中で孤独だった幼い頃と異なりトムという友達を得て楽しく「真夜中の庭」で遊ぶのは、幼い頃に帰り「エデンの園」で楽しく遊ぶ、ただそれだけのことであろうか。確かにトムと幼いハティにとって「真夜中の庭」は「エデンの園」であった。しかし老いて、毎晩夢の中でまどろむハティ・バーソロミュー老夫人にとっては、「真夜中の庭」は、天国・「パラダイス」でもあり、「パラダイス」へ、行きつ戻りつしていたのではないだろうか。長い人生の苦労を終え、天国である「パラダイス」で憩う姿と重なってみえる。

現代われわれが描く「エデンの園」のイメージを作り上げたミルトンの『失楽園』の英語のタイトルは *Paradise Lost* であることからも判るように、われわれは「エデンの園」イコール「パラダイス」として捉えているが、果たして同一のものといえるだろうか。

聖書を見てみると、「旧約聖書」にはパラダイス（paradise）という語は出てこない。パラダイスについて語っているのは「新約聖書」である。極めて興味あることである。新約聖書でパラダイスについて書かれているのは、「ルカによる福音書」23章43節、「コリント人への第二の手紙」12章4節、「ヨハネの黙示録」2章7節の3箇所である。では新約聖書ではどのように描かれているだろうか。

「ルカによる福音書」23章43節では、イエスは、並んで十字架に掛かっている犯罪人が、イエスを救い主と認めた時「よく言っておくが、あなたはきょうわたしと一緒にパラダイスにいるであろう。」と告げている。つまりパラダイスは、義人が死後に迎え入れられる天上の楽園・天国である。「第二コリント」も、パラダイスは「エデンの園」ではなくて天国を意味している。「黙示録」のパラダイスは、新しいエルサレムと同様約束された新天地で、失われた楽園「エデンの園」の回復についての言及である。（聖書辞典, 1969, p.678）

「ルカによる福音書」は、どのようにして書かれたのであろうか。新約聖書はギリシャ語で書かれている。著者については、旧来は医者であったルカ、あるいはパウロの「同行者」ルカがパウロの福音を書にしたためたとされていたが、現在ではこの説を取る学者はまずいない。「ルカによる福音書」の著者は、文体、ギリシャ語の語彙の豊富さから言って四福音書の著者の中で、唯一人ヘレニズム文化の正規の教育を受けた人物であるとされている。彼はユダヤ教に詳しかったと同時に、七十人訳聖書に精通し、その文体を随所において模倣している。（佐藤研, 1998, p.258）

「創世記」が書かれた時代・場所の影響を受けていると同じように、「ルカによる福音書」もギリシャの影響が強いといえる。メソポタミアの人々にとって幸福な場所は、木々に囲まれ水の流れる場所であったが、ギリシャでは「さまざまな変化が起こっている大気の上位に存在する、輝かしい不動の領域を幸福の場」（フロッサール, 1981, p.10）と考え、新約聖書では楽園は、死後に行くことの出来る天上にある「パラダイス」となったのである。

ユダヤの地で生まれたキリスト教は、ギリシャ、ローマへと布教され、発展していく段階でエデンの園とパラダイス、地上と天上にある楽園の概念に、さらに古代ギリシャ・ローマの至福の地、常春のエリュシオンの野とアルカディアを包括していった。メソポタミアの庭園は樹木庭園であったが、庭園に花卉（バラ、ユリ、スミレ、オランダセリ、ケシ、クロッカス、ヒヤシンス等の芳香植物）が植えられるようになったのは、紀元前五世紀ギリシャ最盛期のことである。（針谷, 1956, p.15）草花の咲き乱れる常春の楽園のイメージは、ギリシャの影響を受けたものと言えるだろう。

マーリオ・ヤーコビは『楽園願望』で「ありとあらゆる苦悩や葛藤、欠乏から開放されたいという憧れは、人類永遠の夢であり、古来、人の心をとらえてはなすことがなかった。それは至福世界の夢であって、そのありさまはほとんど全ての文化において、楽園神話というかたちで描き出されている。」（p.7）と述べている。我々が今日抱く「エデンの園」・「パラダイス」のイメージは、こうした人類の至福世界への夢を包括したものであると言えよう。

しかしながら、新約聖書・キリスト教の世界では、神はアダムとイヴを原罪により、「エデンの園」から追放したが、キリストによる贖罪により天国に「パラダイス」をおつくりに成られたと語る。つまり神のお造りに成られた楽園は、地上にあった「エデンの園」と天国の「パラダイス」、二つあるのである。

「旧約聖書」と「新約聖書」を見る限りにおいては、地上の「エデン園」と天国の「パラダイス」は、原罪と贖罪によって、厳然と分けられていて同一のものであるとは言えないのである。

ハティ・バーソロミュー老夫人は、幼い頃、孤児になり親戚に引き取られ、孤独な子ども時代を送った。幸せな結婚生活ではあったが、2人の息子は戦死してしまい、更に夫に先立たれてしまった。今は年老いて、庭園を失い、昔の面影のないフラットに改装されてしまったかつての邸宅の3階に住み、1人淋しく死を待つ日々を送っている。毎夜「真夜中の庭」で遊ぶ夢を見るバーソロミュー老夫人は、人生の重荷を下ろして天国「パラダイス」に憩う日が近いのである。

『トムは真夜中の庭で』は以上見てきたように、原罪を犯した人間は死すべき存在となり、「エデンの園」から追放され、男は額に汗して働き女は生みの苦しみを与えられ、生きていかなくてはいけないが、やがてキリストの救いにより天国の「パラダイス」に迎えられ、安らかな永遠の時を生きることが出きるという聖書の教えが、基になっている。そしてそれは、我々が生きていかなくてはいけない人生そのものである。

結　び

人間が常に失われた楽園を願望するのは、人生の苦労が、時にあまりにもつらいものであるからである。そうした時人間は、失われた楽園・「エデンの園」に戻りたいと思う。トムは弟が麻疹にかかってしまったため、楽しく過ごすことにしていた夏休みを台無しにされ、子供もいない庭も無いおじさんのフラットの狭い一部屋に、半ば幽閉状態で閉じ込められ失意のどん底にあった。そんな彼の心を癒してくれたのは、「真夜中の庭」が「エデンの園」であったからである。そして「真夜中の庭」、「時の謎」を考える過程で、トムは確実に成長していく。最後に、ハティはフラットの大家さんである年老いたバーソロミュー夫人であり、夫人の夢の中で二人は遊んでいたことが明かされる。孤児で従兄弟たちから邪険にされ、いつも友達を求めていたハティの思いと、おじさんのフラットに隔離され友達を求めていたトムの思いが一つになって奇跡が起こったのである。

> 「あのバーソロミュー夫人は、トムより心もち大きいか大きくないかっていうぐらいに小さくちぢんでしまったおばあさんですけどね……トムは、相手がまるで小さな女の子みたいに、両腕をおばあさんの背なかにまわして抱きしめていたのよ。」（ピアス、1980、p.337）

という、物語の最後のグウェンおばさんの言葉に深い感動を覚えるのは、「真夜中の庭」の謎が解き明かされたからだけではない。トムが抱きしめたのは、庭で一緒に遊んだ大好きなお友達だった少女ハティであり、今や愛する夫や息子達に先立たれ孤独な生活を送る、年老いたハティ・バーソロミュー夫人だからなのだ。

トムが、バーソロミュー夫人を抱きしめた時、子供にとって理解を超えた、自分も年を取ること、大人になるということ、そして死を迎えるということ、生きるということの重さを、トムは悟った。「真夜中の庭」で楽しく遊んだ少女のハティと、人生を終えようとしている老女ハティが、同時にそこには存在している。人生そのものを凝縮して見せた感動的な情景である。

イギリス児童文学には、『秘密の花園』等、親を無くし、又は親とはなれて過ごさなくてはいけない子どもたちが「囲まれた庭」で遊ぶ事で、癒され、成長し、生きる力を得ていく物語が多く書かれている。庭にそうした不思議な力があるのは、「囲まれた庭」が「エデンの園」であるからなのである。(西澤, 2002)

イギリスでは1950年から1970年代にかけて優れた数多くの作品が書かれているが、共通するテーマは、「過去を再発見」し「成長すること」と言われている。

カーペンターは

> 子どもの主人公がアルカディアの世界に入っていくことがあっても、その世界自体は目標点という事にはならない。その世界は、当の子どもが自らのアイデンティティを発見し、人生の挑戦に立ち向かう過程の一部をなすものだ。そして、その過程の中では、きまって大人との深いつながりと相互理解という問題がからまってくる。こうして、もはやその子どもは隔離された世界に留まり続けることはない。
>
> このテーマがどの作品よりも上手く処理されているのが、58年の『トムは真夜中の庭で』である。(カーペンター, 1988, pp.445-6)

と評している。

トムは「真夜中の庭」で少女ハティと遊び、そして「真夜中の庭」を出て、老女になっていたハティ・バーソロミュー夫人と再会し、生きること、老いることの意味を確かに悟ったのだ。

テキスト：フィリッパ・ピアス『トムは真夜中の庭で』高杉一郎訳、岩波書店、1980年.
Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden*, Harmondsworth: Puffin Books, 1980.

引用文献

『聖書』日本聖書協会、1983年。

The Bible, Authorized Version. John Stirling ed.. London: The British & Foreign Bible Society, 1964.

The Revised English Bible, Oxford University Press, Cambridge University Press, 1989.

カーペンター、ハンフリー『秘密の花園—英米児童文学の黄金時代—』定松正訳、こびあん書房、1988年。

Carpenter, Humphrey. *Secret Garden—A Study of the Golden Age of Children's Literature—*. London: Unwin & Hyman Ltd., 1985.
佐藤研他訳『新約聖書Ⅱ　ルカ文書　ルカによる福音書、使徒行伝』岩波書店、1998年。
針ヶ谷鐘吉『西洋造園史』彰国社、1956年。
保坂高殿他訳『新約聖書Ⅴ　パウロの名による書簡　公同書簡　ヨハネの黙示録』岩波書店、1998年。
Pearce, Phippa, "Chosen for Children", The Library Association, 1967.
フロッサール、アンドレ他編『図説大聖書』新見宏監修、講談社、1981年。
ヤーコビ、マーリオ『楽園願望』松代洋一訳、紀伊国屋書店、1988年。

参考文献

〈洋書〉

Adams, William Howard. *Gardens Through History*. New York, London, Paris : Abbeville Press Publisher, 1991.
Brown, Jane. *The Pursuit of Paradise*. London: Harper Collins Publishers, 1999.
Burnett, Frances Hodgson. *The Secret Garden*. London: Penguin Books, 1995.
Eliade, Mircea ed. *The Encyclopedia of Religion*. New York: Macmillan Publishing Company, 1987.
Fairbrother, Nan. *Men and Gardens. New* York: Lyons & Burford Publishers, 1997.
Francis, Mark. & Randolph T. Hester Jr. ed. *The Meaning of Gardens*. Boston: The MIT Press, 1990.
Jellicoe, Geffrey. & Susan Goode. ed. *The Oxford Companion to Gardens,* Oxford: Oxford University Press, 1986.
Milton, John. *Paradise Lost*. New York: The Odyssey Press, Inc., 1935.
Townsend, John Rowe. *Written For Children*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd.
Wheeler, David, ed. *The Penguin Book of Garden Writing*. London: Penguin books, 1998.

〈和書〉

赤川裕『英国ガーデン物語』研究社出版、1997年。
安藤聡『ファンタジーと歴史的危機』彩流社、2003年。
安西信一『イギリス風影式庭園の美学』東京大学出版会、2000年。
川崎寿彦『庭のイングランド』名古屋大学出版会、1983年。
川崎寿彦『森のイングランド』平凡社、1987年。
川崎寿彦『楽園のイングランド』河出書房新社、1991年。
木田献一、荒井献監修『現代聖書講座第3巻聖書の思想と現代』日本基督教団出版局、1996年。
旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』教文館、1989年。
小出兼久『聖書の庭』NTT出版、1998年。
近藤司朗編『新共同訳旧約聖書語句辞典』教文館、1992年。
近藤司朗編『新共同訳新約聖書語句辞典』教文館、1991年。

西澤喜代美「『秘密の花園』論　―母の愛の宿る庭―」、十文字学園女子大学『社会情報論叢』第６号、2002年。
日本イギリス児童文学会編『英米児童文学ガイド』研究社、2001年。
針ヶ谷鐘吉『西洋造園変遷史』誠文堂新光社、1997年。

〈翻訳書〉
アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』山下圭一郎主幹、大修館書店、1984年。
ガブリエーレ・ヴァン・ズイレン『ヨーロッパ庭園物語』小林章夫監修、創元社、1999年。
スコット-ジェームズ、アンヌ『庭の楽しみ　西洋庭園二千年』横山正他訳、鹿島出版会、1984年。
フランシス,M., R.T. ヘスター Jr, 共編『庭の意味論』佐々木葉二、古田鉄也訳、鹿島出版会、1996年。
フランシスコ会聖書研究所訳注『聖書　原文校訂による口語訳　創世記』サンパウロ、1996年。
プレスト, J.『エデンの園』加藤暁子訳、八坂書房、1999年。
ヴァイザー、アルトゥール監修『ＡＴＤ旧約聖書註解（1）創世記』山我哲雄訳　ＡＴＤ・ＮＴＤ聖書註解刊行会、1993年。

要　旨

本論はフィリッパ・ピアスの『トムは真夜中の庭で』(Philippa Pearce, *Tom's Midnight Garden*, 1954) を取り上げ、作品のテーマと庭の関係について考察する。

ピアスはこの物語を書いた意図は、子どもにとって一番信じにくいことは、時間が人間にもたらす変化、すなわち子どもはやがて大人になり、大人もかつては子どもであったということであり、この理解困難なことをこの物語の中で探求し解決しようと試みたと述べている。

この物語は人間に及ぼす「時間」の不思議さを描いている。この世の時間は死に向かって時を刻み続けるが、トムと少女ハティの遊ぶ「真夜中の庭」に流れる時間は、そうしたこの世の時間とは異なっている。13字を打つ不思議な大時計の金色の振り子に刻まれた『聖書』の黙示録の言葉「もう時間はない　Time No Longer」をキーワードに、トムは庭園に流れる時間の謎解きをする。

トムが理解した「もう時間がない」は「死に向かって流れていく時間は存在しない」であった。毎夜楽しく遊ぶ「真夜中の庭」は、永遠に遊んでいられる庭、すなわち「エデンの園」として描かれている。しかし少女ハティと楽しく遊んだのは、年老いたバーソロミュー夫人の子どもの頃の夢の中であったことがわかった時、老バーソロミュー夫人にとっての「もう時間がない」は死期の迫っていることを意味する言葉となる。毎夜夢の中で遊ぶ庭は「エデンの園」であると同時に、死後迎え入れられる楽園・天国の「パラダイス」でもある。

『トムは真夜中の庭で』は、「エデンの園」から「パラダイス」へと生きていく、すなわち、「エデンの園」で遊ぶ無垢な子ども時代、人生を苦労して生き、やがて天国の楽園「パラダイス」へと迎えられる人間の人生を見事に描いた物語である。

ABSTRUCT

Philippa Pearce wrote about the influence of time on human beings in her story, *Tom's Midnight Garden*, 1958, because it is very difficult for children to understand that children will be adults, and adults were once children. Time in our world proceeds to death but time in the midnight garden is quite different from ours. The key word of the story is the phrase "Time No Longer" written on the golden pendulum of the big grandfather's clock in the hall. The phrase is from the Bible, the Revelation of John. When the clock tells the time 13 o'clock, the beautiful garden appears and Tom and Hatty play there. Tom tries to solve the mystery of time in the midnight garden by this key word.

The midnight garden is written as the Garden of Eden, so time there is eternal. Tom wants to play there with Hatty forever. But Tom finds the midnight garden exists in the dream of old Mrs. Bartholomew who was once the girl Hatty. For children like Tom and Hatty, the garden is the Garden of Eden, but for old Mrs. Bartholomew the garden is Paradise in heaven where the dead go.

This story shows us the life of human beings from childhood to old age in an instant when Tom hugs old Mrs. Bartholomew. The midnight garden is the Garden of Eden where innocent children can play and Paradise where adults can rest after long hard lives.

本論は2001年度特別研修の研究を基に、発展させまとめたものである。